未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川（ひらかわ） 新（あらた）

㉝慶長遣欧使節船の復元

1990年の使節船復元準備会の様子（慶長遣欧使節船協会30年史）

復元までの動き

宮城県民や石巻市民などの大きな期待を集めて、慶長遣欧使節の乗った船が復元されたのは1993年のことでした。1989年に宮城県知事に就任した本間俊太郎氏は「伊達な国づくり事業」を開始し、歴史と文化をもとにした地域活性化を県政の重要方針として掲げました。そのもとに設置された「文化の波・文化の風起こし懇談会」が1990年3月に慶長遣欧使節船の復元を提言したことから、復元の機運が一気に高まっていったのです。

同年12月には慶長遣欧使節船復元準備会の設立総会が開催されました。発起人は、一力一夫河北新報社会長、本間俊太郎宮城県知事、石井亨仙台市長、平塚真治郎石巻市長、氏家栄一宮城県商工会議所連合会長、若生金郎石巻商工会議所会頭、藤崎三郎助仙台経済同友会代表幹事ら7人でした。宮城県の政財界あげての動きとして始まったのです。

準備会の趣意書には、「伊達政宗公の命を受け、遙か彼方のローマを目指し、外交交渉の旅に出発した支倉常長一行が乗船した慶長遣欧使節船サン・ファン・バウティスタ号を復元」すると記されています。400年ほど前に遣欧使節を派遣した伊達政宗の夢と、荒波を乗り越えて太平洋を渡った支倉常長らの勇気をたたえるために、使節団が乗ったガレオン船を復元することになったのです。

使節船の復元が「本県の誇りを呼び起こし、地域の活性化に寄与」するだけではなく、海外進出を図った政宗の構想と実行力が「本県の先進的県民性を世界にアピールする良きシンボルになる」ともうたわれています。復元船を新しい観光の起爆剤にするとともに、政宗の開明進取の精神を顕彰し、宮城県の歴史を世界にアピールしようという趣旨でした。

1996年に「東京みなと祭り」のために航海した復元船（伊達の黒船物語）

復元の基本方針

復元準備会の設立総会では、次の四つの基本方針が示されました。

一、木造船とする。
二、原寸大とする。
三、石巻の造船所で建造する。
四、宮城県内の船大工を中心に建造する、

政宗時代の洋式帆船を、地元の船大工たちが実物大で復元するという目標を掲げたのです。石巻の造船界は、大いに盛り上がりました。完成は使節船が出帆した1613年から330年になる1993年としています。残された時間は、わずか3年しかありませんでした。

復元にあたっての課題の一つに、自力航海できる帆船にするのか、それとも係留しておくだけなのかということがありました。自力航海の場合には現代の航海法に従って補助エンジンを搭載しなければなりません。乗組員のための居住施設や発電設備なども船に設けなければなりません。これですと外形は歴史的帆船であっても、実質は近代船になってしまいます。それでは復元の価値が減少しますので、自力による外洋航海は断念しました。

ただし曳航による走行は可能ですので、復元船が完成したあとの1993年には仙台港までタグボートに曳かれて走り、1995年には金華山を回って気仙沼まで航海しています。翌1996年は、東京都の招致を受けて東京湾まで航海しました。

課題の二つめは、復元船をどこに係留するかということでした。石巻市は受け入れに積極的でしたが、牡鹿町、女川町、雄勝町でも渡波を含めた石巻圏東部地区への誘致活動が展開されました。有力な候補地として北上川の中瀬、同河口の石岸、矢本町大曲浜などが候補にあがっていたとのことです。地域起こしの起爆剤にしたいとの願いもあり、激しい誘致合戦が繰り広げられたと聞いています。最終的には石巻市渡波に決定し、現在の宮城県慶長使節船ミュージアムが建設され、1996年にオープンしました。復元船は海水を引き入れたドッグ棟に係留し、展示公開されてきたのです。今年はミュージアム開館からちょうど30周年にあたりますので、記念イベントを計画しています。

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。